



お船の骨組み 住吉神社 (住吉区)

ヤグラにウデギをしっかりと結び、割竹で腹を作り上げる



斜面を転がるオトナブネ 山神社 (岩原区)

他のオフネと違い「担ぎブネ」であり、最後に壊すことが特色

安曇野の地に息づく古代のロマン

~国選択無形民俗文化財~

安曇平のお船祭り

私たちが暮らす安曇野には、船の形をかたどった山車^{だし}を作って曳き回し、お祭りを
行う地区が数多くあります。海のない山国であるにもかかわらず、安曇平の58カ所(現
存・廃絶含む)でお船祭りが行われていたのは、海の民「安曇族」が由来するとも言
われています。平成29年3月に「安曇平のお船祭り」が、国の「記録作成等の措置
を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されました。これを受け、市では平成29年度
から3年間、お船祭りの本格的な調査を行い、約220頁の調査報告書を作成しました。
本年は新型コロナウイルス感染症の影響から、例年どおりの祭りを開催することが
できないませんが、個性豊かな各地のお船祭りについて紹介します。



300年以上の歴史

調査は、旧梓川村・池田町・松
川村を含む「安曇平」を対象範囲
として行われました。安曇平で
は、現在も23地区でお船祭りが行
われ、35地区が過去に行っていた
ことが分かりました。

お船祭りがいつから行われて
いたかは、いまだに解明されてい
ませんが、現在見つかっている古
文書の最古の記録が1689(元
禄2)年であることから、300
年以上の歴史があることは確実で
す。

お船祭りの特徴

●オフネの呼び方

オフネ(一般的な呼称としての
表記は「オフネ」とします)には、
「船・舟」等の漢字が使われます。



令和2年3月発行
市内図書館で閲覧できます

穂高地域では、穂高神社が「御船」
と表記しているためか「船」の字
が多いようですが、豊科・三郷・
堀金池田町・松川村では「船・舟」
の使い分けはしていません。よう
です。また、明科地域では、オフネ
をシバブネ(柴舟・しば舟)と
呼ぶ特徴があり、オフネの正面や
側面を杉の葉などで飾って柴を表
現していると考えられています。

●オフネの構造

オフネの土台となる部分はヤグ
ラと呼ばれます。この土台に、ウ
デギやハネギと呼ばれる長い棒状
の部材を取り付けます。ウデギ・
ハネギに囲まれた場所のうち、船
の舳や艫にあたる部分は腹と呼ば
れ、割り竹や広葉樹で丸みをもつ
た膨らみを作り出します。上部は
ヤマ・扇と呼ばれる、人形や飾り物
を置きます。

山神社(岩原)では祭りの最後
に、境内の斜面でオフネを転がし、
構造材ごと壊します。

●人形と人形飾り物

オフネの飾り物としては、人形
飾りが特徴的です。題材は、戦国
時代の合戦や神話・伝説が多く、
穂高神社(穂高)・熊野神社(中萱)・
八幡宮(重柳)・豊里穂高神社(豊
里)・神明宮(潮)・萩原神社(萩原)・

八幡宮(上生野)等では、自分た
ちで人形飾り物の制作を続けてい
ます。

●オフリヨウ

今回の調査では、お船祭りで16
の地区がオフリヨウ(オフレ・御
布令など)という儀式を行ってい
ることが分かりました。オフリヨ
ウでは、オフネや幟が境内を3周
するとう共通点があるようです
が、その内容や所作は地区ごとに
異なっています。

お船祭りのこれから

かつてお船祭りは、山間部を含
む安曇平のあちこちで行われてい
ました。今回の調査では、途絶え
てしまったお船祭りも調査対象と
したことで、集落の高齢化・過疎
化や地域社会の結びつきの変化が
浮き彫りになりました。反面、積
極的に祭りを伝承しようとする姿
勢も多くみられました。世代を超
えて、地域の人々を結びつけるパ
ワーこそがお船祭りの本当の価値
ではないでしょうか。

図文化課文化財保護係

(TEL) 2464 (FAX) 2338

祭りにかける静かな闘志を感じる

■調査報告書をまとめ終えて
調査委員会と市文化財調査委員
の皆さんがチームワーク良く、一
生懸命に調査してくださったの
で、内容が充実した220頁にわ
たる報告書ができました。

各地区のお祭りに携わる皆さん
も快く調査に応じてくださり、オ
フネの制作にかかる準備期間やお
祭り当日の動きなども時刻入りで
記載しています。また、オフネの
作り方は構造的な図面が入ってい
たり、お囃子は「トントントンヒヤラ
リ」と節回しが聞こえてくるよう
な細やかな調査がなされ、報告書
に記録されています。

■安曇野人の祭りに対する想い

安曇野の人たちは、お祭りに対
して全身の血が騒ぐという形では
なく、心の奥の奥で「やらねばな
らぬ!」と気持ちをたかぶらせ、
静かに沸々と燃えるような想いを
抱きながらお祭りに臨んでいるよ
うに感じます。

お祭りを担う皆さんは高齢な
方も多いのですが、「昔からやっ
ていたことだから、おれの代で絶
やしたくない」という強い想いが

あります。それがおそらく、安曇
野人のその他の文化、人と人との
色々なお付き合いなど、すべての
生活に通じるものがあるように私
は感じています。保守的といわれ
るかもしれませんが、そういうと
ころがお船祭りを続けていく原動
力になっていると思います。

■お船祭りの未来

高齢化が進んでいるので、お船
祭りがいつまで続くか予測できま
せん。加えて、コロナ禍の中で中止
となる場所が多く、実際にこれ
からやめる方向に動いていってし
まうかもしれません。

やめてしまうところが出てく
るのは仕方ないことだと思いま
す。ですが、オフネを作ることだ
けでも継承するとか、2つの集落
で一つの祭りを行うとか、地域ご
とに考えて工夫していくことが大
切かなと思います。

民俗学は生活文化を対象に研究
する学問ですが、生活文化という
のは日々変わっていきます。従っ
て、お船祭りだけは変わらずにや
れというのは矛盾しているし、難
しいことだと感じています。
そもそも、祭りは「楽しいもの」。

一人ひとりが文化の継承者

安曇平のお船祭り調査委員会

倉石 あつ子 さん

■Profile

元跡見学園女子大学教授。市文
化財保護審議会委員、市誌編
さん委員会 委員長職務代理者、
豊科郷土博物館勤務

見るだけではなく、参加するから
こそ得られる楽しみがあると思
います。お船祭りは、安曇野の人の
心を惹きつける力があります。今
年はできなくても、来年実施する
ことができれば、必ず人々をつな
ぎ、地域を発展させる力になっ
てくれるだろうと思っています。

